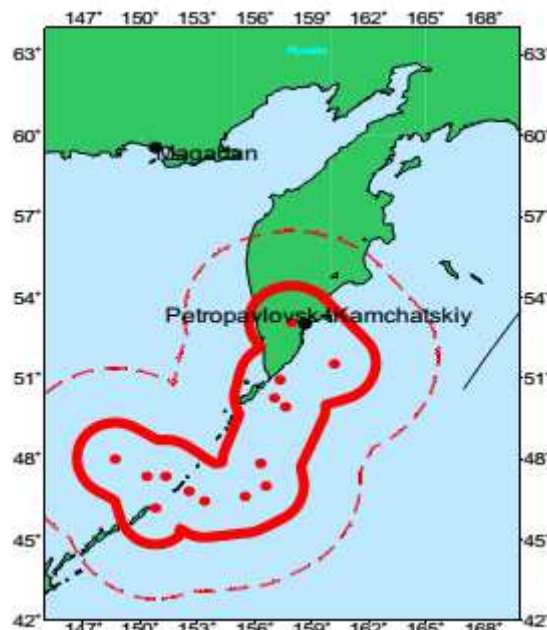


現在入手している各種情報

東海大学ではロシア科学アカデミー（モスクワ：International Institute of Earthquake Prediction Theory and Mathematical Geophysics, Russian Academy of Science）およびカリフォルニア工科大学ロサンゼルス校（Institute of Geophysics and Planetary Physics and Department of Earth and Space Science, University of California, Los Angeles）の研究グループと情報交換を行っております。いずれも私どもの地震活動度解析と同様な（ただし異なったアルゴリズムで）中期地震予測を行っております。

この度、最新の情報が届きましたが、日本周辺では新たな異常は報告されておられません。海外ではカリフォルニア・メキシコ国境付近で中規模の地震発生の確率が高まったという報告が届いています（予測の有効期限は2014年7月）。

日本周辺では今年の4月に千島列島からカムチャッカ半島にかけて、M7.5クラスの地震が2014年1月までに発生する可能性が高いという情報が出ていますが、それ以外の地域に顕著な異常の報告はありません。このアルゴリズムはRTPというもので、最新の臨界現象の物理学（長距離相関）を背景としています。平易な言葉で言い換えますと、ある一定の広い地域（たとえば東北日本全体）で短時間の間に地震活動が集中する事を捉えています。彼らはこれを「地震活動の広域的な連鎖」と呼んでいます。そしてこのような連鎖が千島列島に現れたという事から予測を行っております。



カムチャッカ半島から千島列島にかけての予測。赤実線範囲内が最も可能性が高い地域

現時点では、それ以外の日本周辺では顕著な異常は存在していないという報告を受けています。総合的に判断して、これまで継続的にお伝えしてきた福島沖の異常ですが、前回で「パターンが少し変わりつつある」という事をお伝えしましたが、現時点では若干発生の可能性が低くなったと考えています。

## 首都圏西部・東海・北陸・近畿圏の状況

下の図は10月16日現在の地下天気図です。これまでと同様、大きな異常は観測されておりません。

